

線路の先

私が住む町を走る電車は海へ向かう。

急行に乗れば一時間ほどで、海水浴場として有名な海に着く。

夏の間は、Tシャツに短パンを穿いた二十代前半くらいの男の子達や、マキシ丈ワンピースを着た大学生くらいの女の子達を電車内でよく見かけた。ビーチサンダルやハイビスカスの造花をつけたカゴバッグを見なくても、海へ行くことが分かる。お父さんやお母さんに連れられた子供達が顔を輝かせるのと同じように、楽しそうな表情をしていた。ドアの横に立ってかけられたサーフボードは異世界から来たかのように、光っている。

サーフィンや浜辺で遊ぶこと、夏休みを友達と過ごすこと以上に、海へ行くこと自体が彼らや彼女達にいつもとは違う高揚感を与えているように見えた。

三十年近く同じ町に住んでいるので、その電車に乗ったことは一万五千回くらいある。しかし、海に行ったのは、小学校や中学校の時の遠足も入れて十回ほどだ。学生の頃は、海の方へ向かう電車に乗って通っていたが、海に辿り着くより手前で降りた。社会人というか、フリーターになってからは、反対方向の電車に乗って仕事に通った。反対の終点は、東京の都心と言われる辺りだ。

学校はあまり好きではなかったし、アルバイトは大嫌いだった。学校もアルバイトもそれなりに楽しいことはあった。でも、嫌なこともたくさんあった。ただ、楽しいことだけの人生なんてありえないし、もしも楽しいことだけだったとしても、通学や通勤というのは、嫌だなどという気持ちも多少は付きまとうものだろう。

曇りや雨の日はいい。学校に行って勉強をする、会社に行って仕事をする自分にあまり大きな疑問は感じない。問題は晴れている日だ。青い空が広がり、風も心地いい、どうしてこんな日に朝から夕方まで、学校や会社に籠らなくてはいけないんだと小さな疑問が生まれる。そこから、自分の人生にはもっと違う選択肢があったのではないかとという大きな疑問に膨らんでいく。海にでも行って、学校や会社をサボってしまいたい。繰り返し、そう考えるようになる。

中学生や高校生の頃の私は、授業中はほぼ寝ていたが、学校には毎日通っていた。出席が厳しい学校だったという気もしないし、クラスにはサボっている子も少数だけだった。短大なんていくらでもサボって良かったのに、サボらなかった。友達も少なかったし、サークルやクラブ活動にも所属していなくて、ただただ出席確認のために学校へ行く日々だった。一度サボったら、永遠に行かなくなる気がしていた。時給制なので、アルバイトは遅刻も早退もせず、熱があっても休まなかった。インフルエンザだから帰れと言われるまで、働きつづけた。

海に行きたい。線路の先に海はあるのに、その気持ちが行きわたることはなくて、妄想のようなものだった。

二十代半ばになる頃、私は東京都心にある小さな出版社でアルバイトをしていた。雑居ビルの中にある狭い事務所で、理系大学の進学を目指す高校生向けの問題集を作っていた。いまいち話が通じないおじいちゃんみたいな男性が三人、目を合わせてくれない三十代の男性が二人、絶対に年齢を明かさななければいけない年齢は分かるソバーージュの女性が一人、計六人の社員がいた。

その出版社で私は、スキャンした図形の拡大や縮小に失敗して比率をおかしくしたり、受験科目のデータをうっかり抹消したり、おやつ時間にカルピスを配り忘れてソバーージュに怒られたり、おじいちゃん達用のカルピスをこっそり飲みまくったりしていた。

困った時に頼れる人も、一緒にカルピスを飲みながら愚痴を言い合える人もいなかった。トイレは和式で、冷蔵庫にはいつ作ったか不明な麦茶が入っていて、古いパソコンはデータを読み込むのに十分から二十分かかる。昼休みに自分の席で本を読みながら弁当を食べていたら、おじいちゃん達が唾を飛ばしながら話しかけてくる。

小さなことがストレスとして、私の中にゆっくりと蓄積されていく。問題集の図形がおかしくても私には関係ないと思ってしまうくらいに、心は鈍くなっていた。無能な自分が悪いと反省する気持ちも失った。

データが一瞬にして消えても、ぼうつと窓の外を見ていた。初めてのことでないので、おじいちゃん達に言い出せなかった。通りの反対側に駅のホームが見えた。三分に一本の間隔で電車が止まる。それでも、ホームにはすぐに人が溢れる。たくさんの人が電車から吐き出され、たくさんの人が電車でいき、たくさんの人がホームへ階段を駆け上っていく。一人一人の顔なんて見えなくて、同じ人達が循環しているように見えた。

一体、私は何をしているのだろう？

短大を卒業して就職しなかったのは、演劇がやりたかったからだ。演劇のワークショップに通い、書く方が好きだと気がついてからは小説家を目指していた。やめたい！ アルバイトをやめたい！ 今すぐやめたい！ そう考えたなら、息が苦しくなった。

しかし、そこで早退する度胸はないし、やめてしまったら生活ができない。消えたデータについては考えないようにして、とりあえず他の仕事をして終業時間まで働いた。

そして、家には帰らず電車に乗りつづけ、海へ向かった。海に着いた時には、もう夜になっていた。暗くなつた砂浜に体育座りして、月がうつつて道を作っている海を眺めた。しばらくぼんやり眺めていたら、なんとなくなつて心は晴れた。

一カ月も経たないうちに、そこでのアルバイトをやめた。今後は好きなことだけをしようと思った。

それから、しばらくフリーター生活はつづいたのだが、三十歳を過ぎてどうにか小説家になる権利証的な新人賞を手に入れた。

『海に見える街』は新人賞をいただいた出版社以外で初めての小説のお仕事だった。初回

を書く気持ちとしては、アウェイ戦である。

最強布陣で臨もうと決め、好きな物をたくさん揃えた。初回の主人公に本田君という自分と同年代の青年を選び、図書館で働かせ、小鳥を飼わせ、海辺の町に住んでもらうことにした。

連載中に取材のために海へ三回行った。三話目の「金魚すくい」を書くために冬の海を見にいった時のことだ。十二月の後半だった。オフシーズンの海水浴場は閑散としていた。お土産屋さんの扉は閉まり、海岸沿いのレストランは開いているのかどうかよく分からないう。年末年始に向けてなのか、改修工事中の店が多かった。海沿いの道を歩き、町中を歩き回り、砂浜へ向かった。アルバイトの帰りに来たのと同じ場所だ。

夕方になり、空が暗くなっていくのを眺めていたら、私の後ろにスーツ姿の男の人が座った。二十代半ばくらいの青年だった。入社三年目というところだろう。先輩ほど仕事はできないし、後輩は入ってくるし、年齢的にも悩む時期よねと思いつながら、背後から漂ってくる重い空気を感じていた。

海を見たからって、何が変わるわけでもない。苦手な仕事はそのまま机の上に残っているし、怒る上司が急に優しくなることもない。何かを変えたければ、具体的な行動を起こすべきだろう。でも、海を見ると、自分の中では何かが変わるのだ。がんばろうというほどの強い気持ちではなくても、ほんの少しだけ気持ちが明るくなる。

ただ、悩む度に海へ行くほど暇ではない。日本は島国なのに、海がない県もある。

『海の見える街』が誰かにとって、海に行った代わりになるような、読んだ後に気持ちが明るくなる小説になるといい。